

沖縄・久高島イザイホーの祭祀植物

誌名	琉球大学農学部学術報告 = The science bulletin of the College of Agriculture, University of the Ryukyus
ISSN	03704246
著者名	新里,孝和 陳,碧霞 西銘,政秀
発行元	琉球大学農学部
巻/号	67号
巻号補足	
掲載ページ	p. 7-13
発行年月	2020年12月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



沖縄・久高島イザイホーの祭祀植物

新里 孝和^{1*}, 陳 碧霞², 西銘 政秀³

¹やんばる学研究会, ²琉球大学農学部亜熱帯地域農学科, ³南城市アマミキヨ浪漫の会

Plants used in the Izaiho National Ritual on Kudaka Island, Okinawa

Takakazu SHINZATO^{1*}, Bixia CHEN², Masahide NISHIME³

¹ Research Association on Yanbaru, Northern Area of Okinawa,

² Department of Subtropical Agro-Production Sciences, Faculty of Agriculture, University of the Ryukyus,

³ Amamikiyo Roman Guide Group, Nanjou City

キーワード: トウツルモドキ, ナガミボチョウジ, 方言アダカ, イザイホー, 国家祭祀

Keywords: *Flagellaria indica* L., *Psychotria manillensis* Bartl.ex DC., plant dialect name of *adaka*, Izaiho ritual, national ritual in Ryukyu

*Corresponding author (E-mail: shinri.takakazu@gmail.com)

久高島の自然と歴史及び 民俗行事の概観

沖縄島南部の久高島が属する旧知念村は 2006 年, 隣接する玉城村, 佐敷町, 大里村の旧 4 町村が合併して南城市に統合された. 久高島は図 1, 2 にみるように, 知念半島の岬から中城湾を挟んで東方約 5.3 km の太平洋上に位置する標高 10–15 m の低島で, 面積 1.3 km², 周囲 7.75 km, 最高点 17.5 m, 形状は細長く北東から南西方向に長さ約 3.3 km, 最大幅約 0.6 km, 地質は琉球石灰岩で構成され, 西側の海食崖の崖下にヤグルガー, ミーガー, イジヤイガー, ウブシガーなどの湧水が分布し, かつてはこの湧水と雨水を生活水としたが, 1978 年, 沖縄島から海底送水を利用するようになった^{1,2)}.

久高島の成り立ちはサンゴ礁起源であるが, 沖縄島の中城湾が陥没した時に残った外縁部と考えられている³⁾. サンゴ礁, 琉球石灰岩を基質とする島の自然植生は日本植生誌⁴⁾から, 石灰岩地常緑広葉樹林のナガミボチョウジ—リュウキュウガキ群団にまとめられ, 相観的にはオオバギ, クロヨナ, ガジュマル, アコウ, クワノハエノキ, リュウキュウガキ, ビロウなどが優占し, 林分にはクスノハガシワ, ナガミボチョウジ, トウツルモドキ, クロヨナ, ホウビカンジュなどが標徴種として生育する. また海浜には海岸・河岸低木群落, 海岸砂丘群落が分布する. クボウの嶽やカペールの拝所の森林は樹高 7–8m のビロウが優占し, 構成種にはオキナワシャリンバイ, アワダン, リュウキュウガキなどの出現頻度が高く, その他低木—草本層にはヤエヤマアオキ, シマヤマヒハツ, アカテツ, ハマイヌビワ, ナガミボチョウジ, トウツルモドキ, ホウビカンジュ, フウトウカズラ, ヤブランなどが出現する⁵⁾. 海岸・河岸低木群落及び海岸砂丘群落が分布するイシキ浜拝所はモンパノキ, クサトベラ, モクビヤッコウ, ウコンイソマツ, ハナカモノハシ, コウライシバ, ホソバワダン, ハマウド, グンバイヒルガオ, クロイワザサ, ハマオモト, シマアザミなどが出現する⁶⁾. 島の北方のビロウ群落の一带と伊敷浜の海岸植物群は県指定天然記念物である. 沖縄の祭祀植物からみると⁷⁾, 久高島の植物相は非石灰岩地の山地性のゴンズイやイヌガシ, イタジイなどを除いて, 石灰

岩地の低地性のガジュマル, ナガミボチョウジ, ヤブラン, ナガバカニクサ, クロツグなどの採取が可能である.

「沖縄県の地名」^{1,2)}から, 久高島は沖縄の神々の原郷と称され, 12 年に一度行われるイザイホー祭祀の最終部の神送り

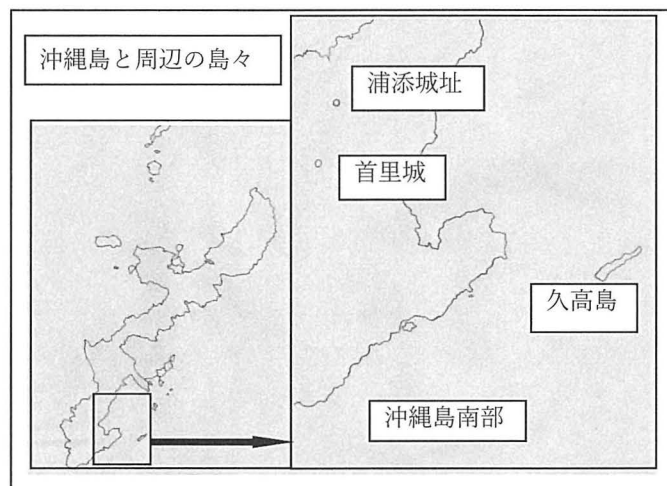


図 1 沖縄島および周辺の島々と久高島の位置



図 2 南城市知念岬から東方太平洋上の久高島を遠望
(2020 年 1 月 2 日)

の「アリクヤーのティルル」には, ハビヤール嶽, トウンギ

嶽, アグウル嶽, フボー嶽, ナカ森, フウンディ森, フサティ森, アカラ嶽など, 多くの聖地が語られる。また久高島では琉球王国の二大行事が行われ, 国君は毎年2月に行幸して麦の初穂祭(ミシキヨマ)をつかさどり, もう一つは間得大君による初穂儀礼であるがミシキヨマ以外にも島の祭をつかさどっていたと考えられている。「中山世鑑」の御嶽開闢神話の九つの御嶽の一つに久高島のコバウ森(フボー御嶽)が含まれ, 「琉球国由来記」には伊敷泊(伊敷浜)・コバウノ森(ウブウガミもしくはフボー御嶽)・中森ノ嶽(ウガミグラーもしくは中ヌ御嶽)に久高巫火神・外間巫火神がみえ, 麦と粟の初穂祭と大祭, 3月・8月の四度御物参の年中行事が記されているという。さらに漁労にかかわるヒータチ・3月綱・7月綱・アミドゥシなど, 年間27回の様々な祭祀行事がある。

久高島の人口は^{1,2)}, 1880年621人(久高村・外間村, 戸数164), 1925年(大正14年)戸数120・450人, 1935年(昭和10年)戸数116・673人, 1947年(昭和22年)戸数138・554人, 1970年(昭和45年)戸数112・424人, 2000年229人で, 1995年の主要産業は水産業, 漁業が盛んで全就業者数の46%を占めている。1970年頃までは自給的なものであったが80年代になるとパヤオの周辺でマグロ・カジキ・ソデイカ漁, サンゴ礁内でモズク養殖業などを中心に, 漁船も5t前後の大型和船が主体となり, 産業化の傾向が著しくなる。特産物としてイラブー(エラブウミヘビ)がある。土地は古い地割制の遺構がみられ, 字久高の総有に属し個人所有はなく, 耕地は幅2~3 m・長さ20 m内外の狭小な圃場となり, 近年はニンジン・スイカの栽培が盛んとなっている。

知念半島は沖縄島の南東部の中城湾側にあり, 長さ4 km余, 幅3~4 kmで太平洋に突き出ている。半島の中央部に琉球石灰岩から成る標高150 mほどの台地があり, その崎からほぼ東方に久高島(図1, 2), やや北方に津堅島その後方に与勝半島が眺望され, 崎の北西側に国指定史跡の斎場御嶽がある。津堅島は現在うるま市の一区であるが, 1626年(寛永3年, 尚豊)の頃は島尻郡大里間切に属し, 後西原間切に移り, 1676年(延宝4年, 尚貞)勝連間切に編入された³⁾。斎場御嶽は「中山世鑑」巻一で, 開闢神の阿摩美久(アマミキヨ)が最初に創った御嶽の一つとし, 間得大君の就任儀礼御新下り(オアラオリ)が行われた。当御嶽は王府の祭祀に直接的にかかわるといわれ, お新下りのとき, 久高島のノロが重要な役割を担い, 久高島から砂が運び込まれた²⁾, 御嶽の入口に近いところに二つの巨岩が上部で支え合ってきた空間があり, それを潜っていくと東方の海上に久高島を望む。また久高島の始祖神話を背景にして, 久高島と玉城の間で3月と6月に麦(久高島から玉城へ)と米(玉城から久高島へ)の贈答儀礼があり, かつては国王が行幸し麦と稲のミシキヨマ(初穂儀礼)を行っていた⁹⁾。

「麦の聖地」と「稲の聖地」という性格は王朝神話(『中山世鑑』)によって付与されたものといい, 久高島は王国時代の国家的聖地であり, 古琉球期から17世紀後半にかけて国王や間得大君らが渡島して国家祭祀を直接司祭したという特異な位置を占めていた⁹⁾。『おもろさうし』は宮廷祭祀の儀礼歌としてとして編纂され, とくにオボツ・カグラの神が強調され, 尚真王(1477年~1526年)の頃の中央集権と王権強化を反映した神世界で, イザイホーは祭りに参加するナンチュの認証

式の意味合いが強いという¹⁰⁾。またイザイホーについて, 湧上¹¹⁾は尚真王時代の統一王国の祝女制度の確立があり, 上村¹²⁾も『おもろさうし』が編纂される過程で国家権力を維持するために宗教統一が行われ宗教政策により国家が部落から宗教の権威をとりあげた, と述べている。赤嶺は⁹⁾「久高島が琉球国にとって聖なる島であり, 国王や間得大君の行幸が行われていたという歴史的事実は, 久高島の伝承世界の中にほとんど面影を留めていない」と主張している。

さらに近世になると, 王府の「祭祀の禁止と再編成」について, 向象賢から蔡温に至る「勸農政策」において古琉球の祭祀の弊害を求め, 祭りは迷信的で, ひまどって農耕しない, 費用がかかりすぎる, 風俗上の問題点をあげた¹³⁾。しかし一方, 久米島では『間切公事帳』によると多くの祭祀に規定が盛り込まれているものの, 「古琉球の祭祀」が残っていたと思われる¹³⁾, 外間は¹⁰⁾イザイホーは「村の祭の基軸をなす毎年の豊年祭がまず大きくあって, その祭りに参加することのできる神女の認証式である」とされ, 山下は¹⁴⁾, 沖縄の神話的世界の三大中心地として, 沖縄島南部の久高島, 北部の古宇利島と辺戸をあげているが, 北部山原では今日なお地域の祭場でシヌグ・ウンジャミの祭祀が盛大に行われている, とする。近世における王府の祭祀禁止にかかわらず, 地方では祭祀に何らかの形で王府向けに変更を加えたりすることで, 秘密裏に固有の儀式を継承してきたのではないかと考えられる。

久高島のイザイホーの祭祀植物に供されるトウツルモドキとナガミボチョウジは¹⁵⁾, 沖縄島北部や中部うるま市の4島ではシヌグ・ウンジャミ祭祀の主役ではない。本論では, 首里王府はなぜ久高島を国の聖地にしたのであるか, 国家祭祀の神女が冠のハブイにするトウツルモドキとナガミボチョウジが他の村落の祭祀でほとんど用いられないのはなぜだろうか, 祭祀植物から土着信仰の歴史的・儀式的な意義を考察してみたい。

2020年初期から今日まで, 世界中に蔓延しているコロナウイルスによる旅行制限・禁止また外出自粛のため久高島への渡航が断たれ, 現地の実地調査および聞き取り調査などは久高島の西銘政秀が担当し, 電話やメールで意見交換を続け, また南城市知念で話し合いをもち調査と報告内容の確認を行った。久高島の人口は減少し, イザイホー祭祀を挙げるには神人が極端に不足して, とくにイザイニガーヤがいなくなり, 外間・久高の両ノロが死去するなど, 1978年を最後にイザイホーは中断した⁹⁾。本祭祀の実施方法や儀礼の内容などは不明瞭となり, ナンチュを務めた女性もハブイに耳の辺りのアダカを挿す位置もおぼろげで, ノロも高齢化し調査も難渋した。いわんや日常生活で植物方言名は縁遠くなり, その謂れ, 課題のアダカ・ダンチャなどの祭祀植物また他地域との関連情報など, その多くが消失していきそうな状況が危惧された。

イザイホー祭祀と祭祀植物

祭祀は「御願立」から, 本祭のイザイホー4日, 直会2日の7日間である。イザイホー祭祀は12年ごとの午年の旧暦11月15日に行われ, 島の北はずれのウドンミヤー(御殿庭)を主催場とする。当間・友利¹⁶⁾と赤嶺¹⁷⁾の調査から儀式的経過

をみると、昭和 41 年 (1966 年) と昭和 53 年 (1978 年) の 2 回の調査などにおける神人は、30 歳以上の全女性が加入する仕組みになっていて、島の祭祀組織は若い方からナンチューヤジク—ウンシヤク—タムトウの 4 階梯に分かれ、ナンチュ (30 歳~41 歳)、ヤジク (42 歳~53 歳)—ウンシヤク、タムトウ (61 歳~70 歳) に、さらに外間ノロ、久高ノロ、ウメーギ (ノロの世話役、掟神)、根神、根神掟神、ソーレーガナシ、アマミヤ、シマリパー、アカハンジャナシ、アジガユー、ウミシル、ムンブシー、七つグルー、ウヤヌル、シチュウザ、ウヤウンシヤク、五つグルー、イキー (ナンチュの兄弟) で、男神には久高根人、アカチュミー、ニーブトイ、ハニマンガナシ、が挙げられる。

その中で¹⁶⁾、祭祀に用いられる植物また樹木を身にする神人をみると、「御願立」の儀式の、ソーレーガナシ (竿取神) は漁業にかんする最高権威者で、島で生まれ育った男は一度は務めなければならない、外間ノロ側と久高ノロ側から各 1 人ずつ 60 歳以上の者が選ばれる。ソーレーガナシのもつ「ソーレーガナシの棒 (はいじょう)」は出漁のときの指揮棒ともなり、直径 7 cm・長さ 3~4 m、それに「ミキ」と呼ぶ木椀、網とくり舟の腰掛け用の板を小型化したものを引き継ぐ。

1 日目はイザイニガヤー (イザイホーを願う人) の女性たちが「七つ橋」を渡り「七つ屋」に籠る。2 日目は「七つ屋」から御殿庭に登場したイザイニガヤーとノロを含む女性たちによってハシララリアシビ (頭垂れ遊び) が行われる。3 日目は朱付けとスジ付けで、「花さし遊び」では、ナンチュの一つの実家でスジ (シトギ) を作る、スジは 1966 年にはモチ米をついたが 1978 年は白玉粉で、練ったものを適当にちぎって 9 個に分け、8 個は同じ大きさものをイザイゲーション (デイゴ材の椀) に立て、1 個は大きめに作ってアダカ (ナガミボチョウジ) の葉にのせて 8 個の上に置く。スジはナンチュのイキー (兄弟) の妻が作る習わしだが、兄嫁 (弟嫁でも可) が作ることもある。イザイゲーションに盛られたスジはお膳にのせ、イキーがトゥバシル (戸柱) の神にそなえて拝み、御殿庭に運ぶ。御殿庭にいる外間根神や外間根神掟神は、イザイ花を白い鉢巻の額に 2 つ、男神たちは左耳に 1 つずつ、ニーブトイはメガネの柄、両ソーレーガナシはぼうしの帯にさしこんで固定する。イザイ花は赤・白・黄の色紙で作られ、赤は太陽、白は月、黄は地の神を象徴しているという。イザイ山から 2 列になって出てくる神女たちは、オモロをうたいながら、中心に掟神・外間ノロ・久高ノロの 3 人、その外側に五つグルー・ナンチュ 8 人、さらにその外側にヤジクたち 30 人の三重の円をつくるが、全員髪を結い上げて白鉢巻をしめ、イザイ花を 2 本額にさす。

4 日目の「アリクヤーの綱引、ナンチュの家まわり、桶まわりの儀式」、アリクヤーの綱引の後に、イザイ山からあらわれムラに入っていく 2 列の神女たちの、外間ノロを先頭にする一列はノロの次に掟神、ナンチュ 4 人、ヤジク 15 人で、久高ノロを先頭にするもう一列はノロの次にナンチュ 4 人、五つグルー、ヤジク 15 人である。ナンチュたちは、御嶽からとってきたハブイ (トウツルモドキ) をかぶり、それにアダカ (ナガミボチョウジ) の葉 2 枚を両耳のあたりにさす (図 3)。2 組の列は、エーファイ、エーファイを唱えながら、両ノロとも 4 人のナンチュの家をまわる。家では、表座敷でイキーが

迎え、座敷の中央にはススキを束ねたタモトを置いてその上にナンチュが座る。ノロが座敷に上がり、ヤジクたちがうたうオモロのあいだに、ナンチュとイキーのサルマーユ (おかゆ) のやりとりがあり、その交換が終わると、ノロはナンチュのハブイとアダカの葉をとり、鉢巻をはずして盆にのせ、イキーにわたして、式が終わる。



図 3 ナンチュのハブイの茎葉 (冠) と耳の辺りに挿すアダカの葉 (2020 年 11 月 27 日那覇市民ギャラリー写真展; 撮影は 1978 年と思われる)

その後、両ノロが率いるナンチュたちは外間殿に向かい、マーデーラの島のジク (軸) という変形十字路のところで、交換式ではずしたハブイやアダカを頭に再度かぶり、手にクバ (ビロウ) の扇を持つ。ヤジクたちはイチャティオーギで身なりを整える。外間殿の庭には、ミキの入った大きなポリ容器がおかれ、その上にクバの葉をのせ、ミキをかきまぜるマーニ (クロツグ) の棒がある。容器を中心に三重の円陣をつくり、ティルルにあわせてしずかに踊る。踊りが終わると、ナンチュ 2 人は、マーニの棒でミキをかきまぜ、ミキ盛が始まる。全員、イザイ山に入り、山から出てきてティルルが始まり三重の円陣をつくって踊る、そのあと、東方に向かって何回かオーギをひろげたまま礼をする。ナンチュ 2 人がタルガナーのわき水道から水を汲み、左まわしに 7 回まぜ、椀に入れて神女や男神にも配られ、4 日間の儀式が終わる。

イザイホーの儀式に使われる植物には、山原ダキ (リュウキュウチク)、アンチャカギー (ハマヌビワ)、マーニ (クロツグ)、クバ (ビロウ)、デイゴ (梯梧の椀)、サンニン (ゲットウ、月桃)、タモト (ススキを束ねたもの)、ハマシユーキ (モンパノキ)、がみられる。ソーレーガナシのもつ棒 (竿) はイヌマキかスギの材がよいらしい¹⁸⁾。イザイホーの祭祀植物の主役は、頭に冠するハブイのトウツルモドキとそれにさすアダカというナガミボチョウジであると思われる。

日越¹⁹⁾は久高島の植生と植物及び方言名の詳しい調査を行い、イザイホー (昭和 53 年・1978 年 12 月 13 日~17 日) にかかわる植物として祭祀の前日は神アシャギの壁をビロウ (フバ) で作り、代用品にワシントンヤシを用いることもあり、床にはリュウキュウチクの稈をすだれ状に編んで敷きその上にフバを敷く。初日と 2 日目にナンチュが 7 回往復する 7 つ橋の材料は、その広場をつくるために伐採したイザイ山の植物で適当なもの、ハマヌビワ (方言名チツチャラクー、

アチャカー, アンチャカー), オオバギ (同チビカタマヤー, チビガーサギー), オオハマボウ (同ユーナ, カーサギー, ユーナガーサ) などの枝や幹を使う。7つ家の材料も同じようにハマイヌビワ, オオバギ, オオハマボウ, アダン (同アダン), リュウキュウガキ (同ガーガー, ガーガーギー), モクタチバナ (同イズナー, イズシ, イジュシ, イズサー, ンススギー, ンススガー) など, 壁や屋根はススキ (同グシキ), 戸はピロウやワシントンヤシである。2日目とはくになし。3日目の頭垂れ遊びは, ナンチュの兄弟たちが9個のスジ (生のダンゴ) をイザイゲーション (デイゴの幹をくり抜いて作った器) にいれてもらうが, スジの1個は大きく, 他の8個の上にナガミボチョウジ (同アダカ) の葉を1枚置き, 大きなスジをのせる。祭祀で外間根人が額, 両頬に朱印して, そこに大きなスジで印をおす。4日目は東方儀礼, アリクヤーの綱引き, 各戸廻り, ウーキマーイがあり, 御殿庭での東方儀礼は庭にピロウを敷き, 儀礼の後ピロウを片付け, 綱引きが行われ, 各戸廻りはナンチュは鉢巻の上にトウツルモドキ (同ハブイ) を輪にしたハブイを被り, 両耳のところにナガミボチョウジ (同アダカ) の葉をはさむ。ウーキマーイはナンチュははずしておいた鉢巻とハブイを再び被り, 手にピロウの扇を持つ。その時ミキ (神酒) が用意されるが, その覆いがピロウの葉で, 神酒をまぜるのがクロツグ (同マニ) である。5日目, ハブイとアダカの葉は, イザイ山の西側の出入口付近にすてる。

4日目に, ナンチュが冠にするハブイと耳の辺りに挿すアダカはノロの所作で行われ, その際の儀式が神女の仲間入りする一連の流れの一つではないかと思われる。イザイホーが聞得大君に仕える神女就任式⁹⁾として, 塩屋湾のウンガミの神ウスイで行われるノロがススキとマンムク (クスノハカエデ) の束で神女の背を叩いて祓う儀式も²⁰⁾, 儀式の重みが異なるとはいえ, 神ウスイの祓い束とイザイホーのハブイ・アダカの冠には神女組織の祭祀に共通する内容・意味が込められているように思われる。

トウツルモドキとナガミボチョウジ

1 トウツルモドキ

イザイホー4日目, 家まわりの儀式でナンチュたちが頭に冠するハブイのトウツルモドキ (*Flagellaria indica* L.) は, 琉球列島の八重山群島, 沖縄群島, 与論島, 徳之島を北限地とし, 南方の台湾, 中国南~インド, マレーシア, ポリネシアに自然分布する²¹⁾。方言名は, 久高島で祭具そのもののハブイと呼称するが, 他に琉球列島では²²⁾ シチョク (沖縄・古名), トウ (沖縄), トゥー (沖縄, 安波・饒波・喜屋武・辺野古・伊計), ヤマトウ (沖縄・沖縄物産志, 久米), フギ (沖縄, 田港), トウダキ (沖縄, 諸志), ヤシマキ (沖縄, 漢那), ヤマショウガ (沖縄, 知念), ハブイ (久高), フージ (伊平屋), トー (久米), クーズ (宮古, 狩俣), クーク (大神), クズ, クズー, クジイ (石垣), クージ (竹富・鳩間), クージイ (竹富), トウ (西表), カーチ, クチ, クーチ, クツ (西表, 船浮), イット, クル, トイ (与那国), がある。また, サントウ・山藤・荊藤があり²³⁾, 台湾名の²⁴⁾ 藤竹仔, ヴアジャナ (太麻里蕃), 中国名²⁵⁾ の須葉藤, 山藤などがある。

熱帯・亜熱帯性のトウツルモドキは, トウツルモドキ科 (*Flagellariaceae*) の常緑のツル性低木で, 琉球列島のとくに琉球石灰岩地に多産するが, 低地林の林内や林縁にもよく出現する。方言のトウ, クズ, 中国の藤などに因む呼称は, おそらく民具に用いるツル性の材料からくるものだろうが, 太い稈は馬鞭に茎はさいてバスケットその他の編物に²⁶⁾, ヤシマキは戦前泡盛の容器にしたココヤシの核果をそのツルで巻いて墓参のときなど肩にかけて使用したらしい²²⁾。久高島の方言ハブイは恐らくイザイホー祭祀に神人が冠にすることに因むと思われるが, 祭具として沖縄の古名のシチョク, 久高島と同間切の知念名ヤマショウガ, 結束用に用いる宮古・八重山名のクーズ, クーク, クージイ, クチ, クルなどとの関連がないだろうか。形声字の音符から, 束は鉢 (ソク, あわせる), 救 (チョク, しめる), 悚・竦 (ショウ, ちぢむ), 嗽・漱 (ソウ, すすぐ) の意を示し²⁷⁾, シチョク・シチョク・スゾクの音に重なるようにある。

仲原²⁸⁾はI文学概説; 口承文芸の「古い唱え物」で, 神女の採り物の一つ方言名シキョは藤蔓モドキであるとし, 「おもろ時代の信仰」で山生姜 (古名シキョ) と呼び, さらに「アサカガネについて」にはシキョ, シキユ, シチョク, シヂコ, セジョク, スゾクは同じで山ショウガは即ちトオツルモドキで, 若いものは小さいアシ又はショウガに似ていて, 成長すると藤 (トオ) のようなツルになって木にまきつく, とある。多和田²⁹⁾は「古琉球の祭具」で, 琉球国由来記巻十七の青葉シジコは葉の青々としたススキで, ススキ, シヂコ, セジョク, ジジキ, ユシチ, スゾク, グシチ, などは「シキユの語とス, シ, セ, ジ, ク, ユ, ドの修飾語根がくっついてできた語」と考え, シチュシチユキがススキだから稲作行事にススキを用いるとする。同様に, シキョには2種類あり, 小さいのをノシキョ (ナジチュ), 大きいのをグシキョ (グシチ) といい, シキョは方言で量のことと両種とも大いに繁茂して量が多いことに因み, 稲作行事の水口祭にススキ3本を立て, ススキ (グシキョ) のように稲の収穫は最大のシキユあれと祈願するという³⁰⁾。

ナガミボチョウジの方言名で述べるように, 奄美群島ではボチョウジをシギク (大和), シジク (名瀬, 大島南) と呼び, マブリアワシの祭具に用いられる³¹⁾。仲原³²⁾はまた, 山ショウガ沖縄古名シジヨクは, おそらくサンニンのような芳香をもつものではないか (「両碑文中の難句について」), ショウガかうコン (ウチン) に似た草で, 神人が祭祀に用いるのはその芳香があるためであろうとする。トウツルモドキに芳香はない, 山ショウガの名前からくる思い込みのような気もするが, ススキとする多和田説²⁹⁾と合わせ, 古名のシキョ・シジヨクについては再考する必要がある。久高島は今回の調査でハブイ以外の方言名は採取できなかった。『おもろさうし』 (上巻, 第一, 12 大きみがいくさせぢみおやせが節) に「聞ゑ当山に 大君ぎや 気遣りよわ 又鳴響む当山に 又せるましの くひしに 又島尻の 蘭草に」とあり, “くひし”は藤づるもどき (久高島ではクイジという) で, のろが神事の時に冠に使う³³⁾, とあるが, 現在その方言名を知る人は探せなかった。

琉球石灰岩を基質とする低島の久高島は³⁴⁾, 御嶽など至る

所の自然林の木々にトウツルモドキの茎が登攀し、繁茂している状況に接する(図 4, 5). イザイホーの本祭は不便はない. 各地の神人の冠にするハブイ・ハーブイ・カブイは, 同じツル性で木に登攀するナガバカニクサ^{35, 36, 37)}(国頭村安田・奥, うるま市浜比嘉島), うるま市のハマサルトリイバラ(平安座島)やカラスキバサンキライ(宮城島)やリュウキュウボタンヅル(伊計島, 今帰仁古宇利島)があるが^{20, 38)}, これらの種と大きく異なるのは, 図 6 に見るようにトウツルモドキは茎は竹稈状で枝は葉鞘に包まれ, 葉は線状披針形で先がしだいに細くなり巻きヒゲとなる形状である. 中国名の須葉藤は「叶稠密, 披針形, 頂端漸尖, 延長成一細長螺旋形的卷須」²⁵⁾とあり, 中国語の叶は葉, 須はヒゲの意で葉の先の巻ヒゲ(髭・鬚)に因むものだろう.

図 4, 6 から, トウツルモドキの天上をめざし他のものを覆いつくすように登攀する太く長い稈と茎を包む葉鞘, 葉の披針形状や葉先の巻ヒゲは, 他地域のハブイ・カブイにするナガバカニクサやサンキライ類などの祭具より, 龍蛇の体軀の撓りや鱗・鱗・髭などの形容を一層際立たせているようにみえる. イザイホーは尚真王時代に举行されてきたもので, 尚真王は仏教信者で政治は儒教を理想としており²⁸⁾(「おもろ時代の信仰」), 王府は首里城正殿に大龍柱を据えるなど龍を

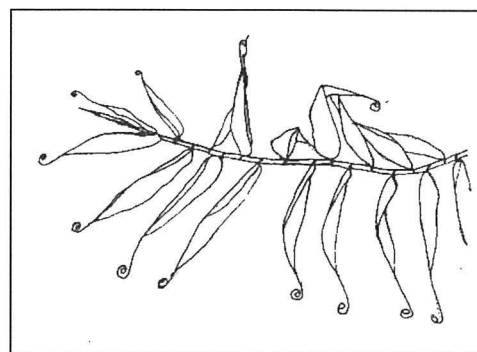


図 6 トウツルモドキの茎と葉の形態

重んじる信仰があり, 神人のもっとも神人なる象徴としての冠のハブイに, 他の村落とくに隣接するうるま市 4 島などのツル植物と異なりより龍の形・姿を強調して久高島によく茂るトウツルモドキが用いられたのではないだろうか.

2 ナガミボチョウジ

ナンチュたちは頭にかぶったトウツルモドキのハブイと両耳あたりにアダカの葉を各 1 枚の 2 枚をさす. 方言名アダカについて, 上江洲¹⁸⁾はリュウキュウアオキ(ボチョウジ)あるいはナガミボチョウジのことであると, またイザイホーなど儀式のハブイにさすのはこれまでの論文や報告でリュウキュウアオキ(ボチョウジ)とあるが^{29, 32)}, 久高島に生育するのはナガミボチョウジで, ハブイにさすアダカはリュウキュウアオキ(ボチョウジ)ではなくナガミボチョウジの葉である⁷⁾. ボチョウジ(*Psychotria rubra*(Lour.)Poir.)とナガミボチョウジ(*Psychotria manillensis*Bartl. ex DC.)はアカネ科(*Rubiaceae*)に属し両種とも常緑性の低木で, 葉や果実の外形がよく似ている. 通常, リュウキュウアオキ(ボチョウジ)は沖縄島, 石垣島, 西表島など高島の非石灰岩地の山地林に, ナガミボチョウジは久高島など琉球石灰岩質の低地や低島に分布する³⁹⁾(図 7, 8).

ナガミボチョウジは, トカラ列島の臥蛇島, 悪石島, 宝島以南の琉球列島の各島に産し, 南方は台湾の紅頭嶼, フィリピン島に分布する²¹⁾. 天野²²⁾, 大野³¹⁾によると, 琉球各島の方言名は両種とも同じで, 奄美地方はウムミユギオット・マンリョー(奄美大島), シギク(大和), シジク(名瀬, 大和, 住用, 宇検, 瀬戸内), 沖縄群島はアザカ(辺野古・旧記録・おもろさうし), アサカ(おもろさうし・真珠湊碑), アダハ(辺士名), アサファ・フォーフックア(饒波), アザマギ・アザマバー(田港), ハブイギー(屋古), トウイヌチビ(漢那), ガラサーチビスグヤー(泡瀬), マヤーギ(伊計), アダカ・アラカ(久高), ポッポイギ・ムムギヌホータ(久米), 宮古群島はツカサギ・ガラサヌファインタナ(伊良部), 八重山群島はインダスケ(石垣), ミズダスケ(川平), ウシヌシタキ(西表), ビタスケ(波照間), ビキタヒカ(与那国)がある. 中国名は⁴⁰⁾九節, 山大顔があり, 海南島の地方名は⁴¹⁾吹籠稈(Ch' ui lung kon), 山打大刀(Shan ta tai to)で, 台湾(恒春下蕃)の地方名に²⁴⁾フフなどがある.

ボチョウジは奄美地方ではマブリアワシの祭具に用いられ³¹⁾, 沖縄地方のハブイギー, 宮古群島のツカサギは神女が祭



図 4 樹上に登攀するトウツルモドキ
(久高島 2013 年 5 月 4 日)



図 5 トウツルモドキの果実
(琉球石灰岩地の浜比嘉島 2016 年 10 月 5 日)



図7 花芽をもつナガミボチョウジ
(久高島 2013 年 5 月 4 日)

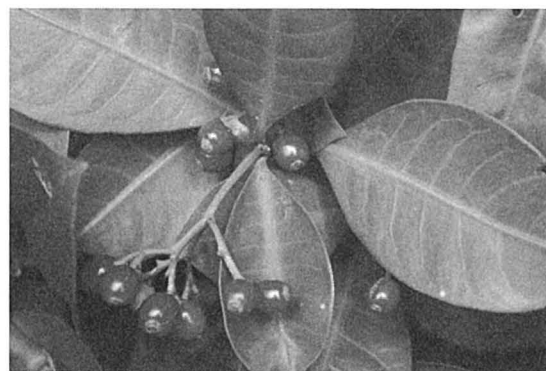


図8 紅熟した果実をもつナガミボチョウジ
(琉球石灰岩地の北中城村 2009 年 2 月 1 日)

事に使うことによる²²⁾。イザイホーでナンチュがトウツルモドキのハブイと一緒にさす方言名アダカの葉は確かにナガミボチョウジである。既報²⁰⁾で論じたように、塩屋湾のウナギミでヌルが手にする“祓い束”はススキとクスノハカエデであるが、これまでの論文や当地の説明によるとその束はアザハパー（ボチョウジ）とジジキ（ススキ）、アザハと薄、あるいはススキとアザハともう1種の計3種である、とあるのは、研究者にとってクスノハカエデ（方言名；マンモク、マンムフ、セッケンパー）が同定されていないこと、アザハの語と当該植物の認識に混乱があると考えられた。つまり、アザハ・アダハは奄美群島ではススキ3本を十字に交差させた1束の意で、方言の交差“アデュル”ことに因むとされ、久高島のイザイホーでナガミボチョウジをアダカ・アラカと称するのは、アザハ・アダハと同じで、ボチョウジ属の葉序がアデュル・アジマーの十字対生の形となることによるであろう^{7, 29)}。イザイホーを基に、首里王府の政策が絡んで沖縄群島ではアザハ・アダカとボチョウジ属が混用され祭祀植物一般に伝播していったのではないかと推考される。

ナンチュが鉢巻にするハブイ（トウツルモドキ）の両耳の側にさすアダカ（ナガミボチョウジ）の葉が2枚であるのは、ナガミボチョウジの葉序が十字対生つまりアジマー（十字、交差、卍）になるのを重視したとしたら、人—神—自然・祭祀植物の民俗からその意義は深奥なものといえよう。卍と十字は、世界のいたるところで生命、宗教などの象徴、その他

の印として用いられる。卍は「サンスクリット語で svastika, 吉祥喜旋, 吉祥海雲などと記され、インドで吉祥のある人や物の象徴、めでたい趣意を表示、仏教では仏心の印として用いられる。また卍模様は、インドでは swastika と呼ばれて現在でも多く用いられ、特にジャイナ教、仏教などでは吉祥、円満、生命、中心、統合などを意味し、世界各地にも広く分布している。」⁴²⁾。十字架は「古代世界のあらゆる文化層において、装飾形態あるいは象徴形態などなんらかの印としてしばしば表されている。エジプト美術においてはアモン神ラーが上部に輪のついた十字架アंकを持つ図が表現されており、その十字架は永遠の生命を象徴するものである。十字は、古代の各地域で太陽、火、生命の象徴として用いられていたが、初期キリスト教で墓標などにも描かれた。」⁴³⁾。卍と十字の形態は、およそ世界中で神や霊的な印あるいは象徴として、さらに霊力を蔵するものとして表現されると考えられる。

沖縄の祭祀植物としての対生・十字対生葉序は、神人が神を憑依して信仰儀式で神と交流しその霊威を示現する大きな力をもつに至ったといえよう。アジマー（卍、十字）の霊力は、これまでのススキ・サン・ゲーンなどの祭祀植物の上に首里王府が仏教を重んじる政策と重なり、合掌の態様を含めて、アダハを久高島の御嶽林に多産するナガミボチョウジが有する十字対生葉序に切換えたのではないかとと思われる。アザハ・アダハ、アザカ・アダカの語と語義は残存しつつ、琉球列島の地域によってススキ、十字対生葉序のボチョウジ属あるいはクスノハカエデなど祭祀植物に広く浸透していったのではないかと思料される。

引用文献

- 1) 竹内理三. 1986. 「角川日本地名大辞典」角川書店, 東京, pp. 325-326.
- 2) 下中直人. 2002. 「日本歴史地名大系第 48 巻 沖縄県の地名」. 平凡社, 東京, pp. 270-272, 266.
- 3) 目崎茂和. 1988. 「南島の地形—沖縄の風景を読む—」. 沖縄出版, 沖縄, pp. 74.
- 4) 宮脇 昭. 1989. 「日本植生誌 沖縄・小笠原」. 至文堂, 東京 pp. 269-271.
- 5) 新納義馬, 日越国昭. 1988. 「久高島クボウの嶽, 拝所カペールのピロウ林」(「日本の重要な植物群落Ⅱ 沖縄県版」. 編集; 環境省, 東京, pp. 44-45.
- 6) 知念村史編集委員会. 1989. 「知念村の自然 (二) 植生, 植物方言名」(「知念村史 第二巻資料編 2」). 知念村役場, 沖縄, pp. 90-94.
- 7) 新里孝和. 2013. 「沖縄シヌグ神祭の植物観」. 名護博物館紀要あじまあ, 17: 41-64.
- 8) 福田恒禎. 1966. 「勝連村誌」. 勝連村役所, 沖縄, pp. 56.
- 9) 赤嶺政信. 2014. 「歴史のなかの久高島一家・門中と祭祀世界—」. 慶友社, 東京, pp. 380-381, 77-84, 399, 313.
- 10) 外間守善. 1987. 「沖縄の歴史と文化」. 中央公論社, 東京, pp. 248.
- 11) 湧上元雄. 1987. 「沖縄の古代祭祀と他界観」(福田晃・湧上元雄編者「琉球文化と祭祀」). ひるぎ社, 沖縄, pp. 108.

- 12) 上村幸雄. 1979. 「日本語の歴史と日本語方言学」(沖縄文化研究), 6:260-302.
- 13) 田里 修. 1993. 「間切と公事」(編集:琉球新報社「新琉球史—近世編(下)」). 琉球新報社, 沖縄, pp. 101, 105-106.
- 14) 山下欣一. 1987. 「基調報告(2) 説話研究の面から」(福田 晃・湧上元雄:編者「琉球文化と祭祀」). ひるぎ社, 沖縄, pp. 25-37.
- 15) 新垣則子, 佐藤宣子, 本永 清. 2016. 「沖縄の祭具—草冠」. 沖縄県文化財調査報告書 151 集—沖縄の信仰用具に関する総合調査事業, 沖縄県教育庁文化財課・沖縄県教育委員会, pp. 204-234.
- 16) 当間一郎, 友利安徳. 1982. 「神々のふるさと久高嶋 イザイホー・生活」. 沖縄公論社, 沖縄, pp. 257-288.
- 17) 赤嶺政信. 2020. 「第三章, 第一節, イザイホー」(「沖縄県史 各論編 第九巻 民俗」). 沖縄県教育委員会, 沖縄年, pp. 565-569.
- 18) 上江洲均. 1982. 「二章 信仰」(上江洲均「沖縄の暮らしと民具」考古民俗叢書〈19〉). 慶友社, 東京, pp. 166, 189.
- 19) 日越国昭. 1989. 「(二) 植生, 植物方言名 1 知念村の主な御願所の植生, 2 久高島各御嶽の植生概観および方言名」(「知念村史 第二巻資料編 2」). 知念村役場, 沖縄, pp. 96-98.
- 20) 新里孝和, 陳 碧霞, 芝 正巳. 2019. 「沖縄, 古宇利島と塩屋湾のウンジャミの祭祀植物」. 琉球大学農学部学術報告, 66:51-63.
- 21) 初島住彦. 1975. 「琉球植物誌(追加・訂正版)」. 沖縄生物教育研究会, 沖縄, pp. 764, 570-571.
- 22) 天野鉄夫. 1979. 「琉球列島植物方言集」. 新星図書出版, 沖縄, pp. 198, 148-149.
- 23) 上原敬二. 1985. 「樹木大図説Ⅲ」(第 9 刷). 明書房, 東京, pp. 1210.
- 24) 金平亮三. 1973. 「増補改訂・臺灣樹木誌」. 井上書店, 東京, pp. 75, 678-679.
- 25) 中国科学院植物研究所. 1980. 「中国高等植物図鑑, 第五冊」. 科学出版社, 中国, pp. 385.
- 26) 天野鉄夫. 1982. 「琉球列島有用樹木誌」. 琉球列島有用樹木誌刊行会, 沖縄, pp. 203.
- 27) 小川環樹, 西田太一郎, 赤塚 忠. 1988. 「角川新字源」. 角川書店, 東京, pp. 490.
- 28) 仲原善忠. 1977. 「Ⅰ文学概説 口承文芸」「Ⅱおもろ研究 おもろ時代の信仰」「Ⅲ金石碑文と古文書 両碑文中の難句について」(仲原善忠全集 第二巻 文学篇). 沖縄タイムス社, 沖縄, pp. 66-69, 498-504, 173.
- 29) 多和田真淳. 1980. 「古琉球の祭具・アザカガネとダシチャクギ(1)-(10)」1963 年, 沖縄タイムス社(「古希記念多和田真淳選集(考古・民俗・歴史・工芸篇)」古希記念多和田真淳選集刊行会編), 沖縄, pp. 178-184, 167, 175.
- 30) 多和田真淳. 1980. 「沖縄先史原史時代の主食材料について」(「南島考古」第四号, 1979 年, 「古希記念多和田真淳選集(考古・民俗・歴史・工芸篇)」古希記念多和田真淳選集刊行会編), 沖縄, pp. 132.
- 31) 大野隼人. 1995. 「奄美群島植物方言集」. 財団法人奄美文化財団, 鹿児島.
- 32) 仲原善忠. 1978. 「アサカガネについて」「源七君との最後の仕事」(仲原善忠全集 第四巻 補遺篇). 沖縄タイムス社, 沖縄, pp. 395, 404, 406-414.
- 33) 外間守善. 2017. 「おもろさうし(上)」(第 4 刷). 岩波書店, 東京, pp. 20.
- 34) 木崎甲子郎. 1985. 「琉球弧の地質誌」. 沖縄タイムス社, 沖縄, pp. 99, 204.
- 35) 新里孝和, 芝 正巳. 2014. 「沖縄・国頭村安田シヌグの祭祀植物ゴンズイ(Ⅱ)」. 琉球大学農学部学術報告, 61:67-78.
- 36) 新里孝和, 芝 正巳. 2014. 「沖縄・国頭村奥シヌグの祭祀植物イヌガシ」. 琉球大学農学部学術報告, 61:79-86.
- 37) 新里孝和, 芝 正巳. 2016. 「沖縄・うるま市, 浜比嘉島のシヌグ植物のナガバカニクサ小論」. 琉球大学農学部学術報告, 63:77-87.
- 38) 新里孝和, 芝 正巳. 2018. 「沖縄・うるま市 4 島の祭祀植物」. 琉球大学農学部学術報告, 65:147-158.
- 39) 新里孝和. 2020. 「亜熱帯沖縄の木や森や里山」. 「亜熱帯沖縄の木や森や里山」出版刊行世話会(代表:諸喜田昌英, 名護市), 沖縄, pp. 192-193.
- 40) 中国科学院植物研究所. 1980. 「中国高等植物図鑑, 第四冊」. 科学出版社, 中国, pp. 264.
- 41) 政宗嚴敬. 1975. 「海南島植物誌 改訂増補版」. 井上書店, 東京, pp. 322.
- 42) フランク, B, ギブニー. 1974. 「ブリタニカ国際大百科事典 6」. ティビーエス・ブリタニカ, 東京, pp. 225-226.
- 43) フランク, B, ギブニー. 1974. 「ブリタニカ国際大百科事典 3」. ティビーエス・ブリタニカ, 東京, pp. 477.

[写真引用]

図 3 比嘉康雄, 上井幸子「イザイホーの魂/久高のニガイ」写真展, 主催:まぶいぐみ実行委員会, 那覇展(那覇市民ギャラリー) 会期:2020 年 11 月 24 日~29 日